

加藤先生を送る

中谷 拓士

パソコンをお使いにならない加藤林太郎先生は、ネット上で先生を「カトリン」と呼ぶ学生がいることなどご存じないだろう。「カトリン」という響きは、昔なら女性の名前のカトリーヌの翻訳語でもあったと記憶する。だが、いまのわたしには聖女カタリナが連想される。この聖女は、言わずとした学問の守護聖人であり、学識深い先生にいつそうふさわしいからである。

加藤先生はフランス文学科創設と同時に、京都大学の助手から関西学院大学文学部の助手になられた。以後、39年にわたって学科と学生たちを見守ってこられたことになる。したがって、文字通りフランス文学科の歴史とともにあり、一期生から現在にいたるすべての学生を知る最後の先生となってしまった。

1964年から2年間、フラン政府給費留学生としてパリ大学で学ばれ、帰国後の1967年に専任講師として教壇に立たれたが、それは学生運動の激しい時代であり、関西学院もその例外ではなかった。校舎のバリケード封鎖、授業停止、機動隊の導入という騒然たる状況の中で、教育者としての生活を始められたのである。そのとき道路封鎖のために学生が切り倒した時計台前の木、クリスマスのイルミネーション用に使われている左右の木も、その後小ぶりなものに植えかえられたが、いまではそんな時代のあったことすら思い出させないほど高くそびえている。それほどの年月が流れた。

しかし、加藤先生のなかにも生きつづけていたのは子供の心だった。これは推測ではなく、わたしなりの断定である。貧しい戦後の時代に手作りの

天体望遠鏡で星を眺めていた少年、パリでカフェに入れる砂糖の包み紙を捨てずにコレクションとした青年、そこに共通してあるのは好奇心を抱くころであり、どんなことにでも楽しみを見いだすことができるという、初々しい感性のみが持ちうるインテリジェンスだった。

アナトール・フランスとアルフォンス・ドーデに関する研究を多く発表されてきたが、それは先生のなかの子供の心が、何気ない細部にかぎらない愛着を示したものと言えるだろう。ただし、それは木の幹を熟知した上でこそないうる枝や葉への偏愛であったことを急いで付け加えておかねばならない。『語尾からの配列による基礎フランス単語集』もそうした範疇の著作であるし、また近著である『文学と挿絵の対話』もその流れの中にある。これは挿絵自体が本文の受容であり解釈であるという観点から分析を進められた、他に類を見ない独自の書物となっている。その小見出しに目を走らせるだけで、先生の視点をうかがうのに十分である。「向こう向きのドーデ」「風車の羽根に喪章」「擬人的な擬音の場合」「地方なまりの訳出」「虚言癖」「創らざる芸術家」「動物が制作の邪魔をする」その他、いかにも先生ならではの言い回しが随所に出てくる。

そのような先生は、呵々大笑するたぐいの笑いよりも、ほのかなユーモアを湛える作品を愛された。大風呂敷を広げるよりも、大人の視野からは消えてしまったもの、子供の背丈だからこそ見えるものに目を輝かせ、ともすれば人が見逃しがちな真実を好んで渉獵された。少年のような心持ちと、おだやかな大人の節度が実にバランスよくひとつになり、現在の先生のひととなり形成され、それは一貫して変わることがなかった。

それにしても、先生の業績を眺めながら不思議だったのは、とうぜんあるはずだと独り合点していた論考がないということだった。たとえば、なぜプロスペル・メリメに関する論文が見あたらないのだろう。古典演劇をはじめとして多くの芝居にも精通しておられたのに、そうした論文もないのである。そのことを知って軽い衝撃すらおぼえるとともに、わたしにそう思わせるほど、先生が数多くの作家について深い洞察をお持ちだったことにあらためて思いたっ

た。

上掲書の小見出しには「父の書齋の子供」なるものがある。アナトール・フランスの母親は夫の死後、書齋に鍵をかけ、しばらくは息子をも中へ入れなかったという。「しかし多くの作家の場合父の書齋は、子供に開放されていたと言ってよい」と文章はつづく。加藤先生はおそらく後者だったのであろう。息子に「林太郎」と、好きな作家の名前をつけた加藤一雄先生の書齋は、林太郎少年の目の前に開かれた楽園だったにちがいないのである。

そうした環境の中で知のコレクターとなった先生は、フランス留学の際も昆虫採集用の捕虫網を持参された。ブルターニュに立つカルヴェールの石像群はすべてまわられたとも聞く。授業ではフランスの漫画も活用された。写真にも興味をお持ちで、学内の写真サークルに入られて、昨年は金賞をとられた。俳句もたしなまれる。ほかにも忘れていることがいろいろありそうである。そうそう、落語好きでもあった。古書店巡りはいまでも昔も変わらない。

「こんなに長く生きるとは思わなかった」とおっしゃったことがある。敗戦後、ひもじい思いをかかえて屋根にはわせたカボチャの花に人口受粉をほどこし、早く実のなることを願った少年が、一時期は彫刻家になることを希望し、結局はフランス文学者となって今日に至った。留学から戻ってみると、一雄先生が美学科の教授になられており、父と子が同じ学部の教壇に立たれるという珍しい教員生活も体験された。そして近著には「父に」という献辞がついている。「亡き父に」ではない。定年を迎えられる今になっても、一雄先生が先生のなかに生きておられる。やはり、先生は林太郎少年のままなのである。「要するに、成長せんかったということやね」という先生の声が聞こえて来そうな気がする。そうではない。先生を見ていると、われわれが成長し損ねたのではないか、つまらぬ大人になったのではないかと思わされるのである。

ところで、最後にどうしても先生の駄洒落に触れないわけには行かない。これも少年の心がなせるわざであるのかどうか。即答はできないが、それが知的な遊戯であったことはまちがいない。そうでなければ、同僚や大学院生

がケタケタ笑ったりするはずもないからである。仏文研究室で、学生にお菓子を下さされて「アンガトウ」(un gâteau) と礼を言われた即妙の駄洒落。いまや学科の古典的名作ともなっているこの文句をはじめ、数知れぬ駄洒落を紙つぶてならぬ声のつぶてとしてとばしつづけ、まわりを絶えずなごませてくださった。しかし、それをダジャレと決めつけていいのかどうか。なにしろ、日仏両語のからみ合って、予想外のものが結びつく言葉の戯れは、時に上質の *pointe* (あるいは英語の *conceit*) を思わせもするからである。

そうした「駄洒落」ともども、先生のもとから多くの研究者が育っていった。誰からも好かれたその先生が、40年になんなんとする関西学院での生活に終止符を打たれる。ご苦労様というより残念という気持ちの方が強いのはわたしだけではないだろう。フランス文学科に連なる多くの方々のさまざまなお思いとともに、あらためて「ありがとうございました」と心より感謝を申し上げたい。

これからもまだまだお世話になります。でも、ひとまずは、さようなら、林太郎先生。

(文学部教授)